



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 学校適応感とその予測要因に関する検討（１）：「学校適応の負の側面」としてのスクールカースト                                               |
| Author(s)        | 水野, 君平                                                                                      |
| Citation         | 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 101-110                                                              |
| Issue Date       | 2016-06-30                                                                                  |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.126.101">https://doi.org/10.14943/b.edu.126.101</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/62507">https://hdl.handle.net/2115/62507</a>           |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                 |
| File Information | 050-1882-1669-126.pdf                                                                       |



# 学校適応感とその予測要因に関する検討(1)

## —「学校適応の負の側面」としてのスクールカースト—

水 野 君 平\*

【要旨】 本論文では、本邦における学校における適応の研究について、学校適応の概要を示した上で、これまでの研究では主眼を置かれてこなかった「学校適応の負の側面」を提示することを目的とした。まず、学校における適応の一指標である学校適応感に注目し、学校適応感はどうような要因によって予測されるのかを整理した。そして、学校適応感を予測する要因として、社会的に望ましいと考えられる要因と社会的に望ましくないと考えられる要因が存在することを示した。そして、社会的に望ましくないと考えられる要因の一例として、「スクールカースト」の問題が存在すること、また「スクールカースト」が学校適応の研究における新たな学術的課題であることを示唆した。

【キーワード】 学校適応, 学校適応感, 学校生活, 「スクールカースト」

## はじめに

エリクソンによれば、中学生は児童期を経て青年期に移行する時期にあたる。中学生は小学生の頃とは大きく様相が異なってくる。第一に、学校の環境の変化がみられる。小学校は基本的に学級担任制であるが、中学校は教科担任制であり、中学校の方が小学校よりも学校の規模が大きくなり勉強する内容もより高度な内容になる(小泉, 1992; 都筑, 2001)。また、中学校からは課外活動である部活動が活発となり、時には部活動の練習や人間関係の過度の厳しさによる問題が指摘(角谷, 2005)されているほどに活発な活動をみせている。第二に、友人関係についても変化が見られる。児童期では、ギャングエイジと呼ばれる遊び仲間の集団であったのに対して、中学校では同性・同年代の仲間のチャムグループ、またはチャムシップと呼ばれる集団に変わっていくとされている(保坂・岡村, 1986; 須藤, 2003)。また、愛着の対象も変化する。児童期では養育者をはじめとする親や大人が愛着対象であったのに対して、青年期では同年代の友人や異性に愛着対象が移り変わるとされている(Hazan & Zeifman, 1994)<sup>1</sup>。つまり、小学生から中学生になるということは、学校という環境面と対人関係面という二つの面で大きな変化を経験するということを意味している。

このような変化に晒されることで生徒はさまざまな問題を抱えることになる。例えば、平成

---

\* 北海道大学大学院教育学院 修士課程  
DOI: 10.14943/b.edu.126.101

1 Hazan, C., & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*, Vol.5, (pp.151-178). London: Jessica Kingsley. が入手不能のため、安藤・遠藤(2005)のレビューによる。

26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2014)によれば, 小中高における不登校児童生徒の比率は中学生が一番高く, 小学校6年生よりも中学校1年生の不登校人数は2倍以上である。これらの問題に関して, 現在までに様々な研究(e.g., 五十嵐, 2011)。が蓄積されてきており, なかでも「学校適応感」という変数が心理学を含めた数多くの分野の研究で使われてきた。

## 学校適応感とは何か

まず, 適応<sup>2</sup>について確認することから始めたい。適応とは, 個人と環境の関係(e.g., 近藤, 1994)を指す概念であり, 近年の学校適応に関する研究では, 適応は「個人と環境の調和」(大久保, 2005)や「主体と環境との調和的關係」(岡田, 2015)と定義されている。また, 適応は個人と環境との間に調和が取れている状態だけではなく, 主体と環境がどのように変化していくのかという調和のプロセスも指す(岡田, 2015; 戸川, 1956)。

そして, 「学校適応感」とは, 学校という環境に対して個人と環境の関係から生じる感情や認知の総称であり, 主観的な適応状態であると考えられている。具体的には, 生活の安心感や充実感や疎外感の上位概念であると捉えることができる(大久保, 2010)。適応との関係においては, 適応感は適応そのものを意味するわけではないが, 個人の適応の一指標として捉えることができるとされている(谷井・上地, 1994)<sup>3</sup>。つまり, 個人の主観的な適応状態の認知とされる学校適応感が, 学校適応の状態を簡便に測定することが可能な変数として扱われてきた。これまでの本邦の研究では, そのような前提のもとにさまざまな児童・生徒の主観的な適応状態に関する知見が蓄積されてきた<sup>4</sup>。これまでの主観的な適応状態に関する主だった研究では, 友人関係・教師関係・学習などの学校における様々な領域における児童・生徒の意識をスクール・モラル概念(e.g., 河村, 1999a)に基づいて尺度が作成されており, 児童・生徒の適応に関する検討がなされてきた(e.g., 石田, 2009; 松山・倉智, 1969)。スクール・モラル<sup>5</sup>とは, 学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属感, 満足度, 依存度などを要因とする児童・生徒の個人的, 主観的な心理状態(松山・倉智, 1969)と定義されている。これらの尺度では, 友人や教師との関係, 学業への意欲などが下位概念として捉えられており, これらの学校諸領域の意識を統合したものが学校適応の程度として検討されてきた(e.g., 浅川・尾崎・古川, 2003; 小泉, 1995; 橘川・高野, 2005; 南・浅川・秋光・西村, 2011)。学校適応の一指標として, 学校適応感を捉えることは, 学校教育の効果を測定する役割(松山・倉智, 1969)や生徒

2 学校適応の研究における適応の詳しい概念のレビューは大久保(2010)や岡田(2015)を参照されたい。

3 つまり, 学校適応感のみが児童・生徒の学校適応を測定するというわけではないということも意味する。例えば, 適応の一指標としてストレス反応を用いた研究(e.g., 下田・石津・樫村, 2014)や無気力感を用いた研究(e.g., 竹村・前原・小林, 2007)が存在する。

4 例えば, 国立情報学研究所のCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>)において, 検索キーワードを「学校 適応感」と設定して検索した場合, 学会発表論文集以外の267件の研究論文がヒットした。この結果は査読付き雑誌論文と大学等の紀要論文を含めた結果である。

5 なお, モラル(morale)とは, 「集団状況における成員間の融合的結合意識を基礎とした, ある目的に集団として志向する成員の意欲的・積極的な態度ないしは行動」と定義される(松山・倉智, 1969)。

が学校生活の中でどの部分に問題を抱えているかということを明確化して援助ニーズを把握するという役割（河村，1999b）において有用な指標であると考えられる。例えば，Q-U（河村，1999c）は支援が必要な生徒の把握や不適応の予防を目的として学校で用いられる事も多い（福島県教育センター教育相談チーム，2008；谷川，2012）。

## 新たな学校適応感の視点

しかしながら，大久保（2010）や岡田（2015）が指摘するように，これまでの学校適応感の研究は測定上の問題を抱えてきた。大久保（2010）は測定上の問題として，これまでの学校適応感の尺度は「下位領域加算型」（岡田，2015）という，学業や友人関係などの個別の要因の集合（Figure 1）として捉えられてきており，個人の環境の意味づけが無視されてきたと指摘している<sup>6</sup>。また，どの学校も同じようにその領域について重視しているとは限らないという指摘がある（大久保，2005）。そのような仮説のもと，個人と環境の関係性を考慮した学校適応感の尺度作成が必要だと指摘がなされ，青年用適応感尺度（大久保，2005）が作成された。そしてその仮説通り，学業への取り組みが適応感を予測することに関しては，いわゆる進学校では劣等感のなさを予測したが，いわゆる困難校では劣等感のなさを予測しなかった。このように，学校環境とその環境で生活する生徒が違えば，あらかじめ想定された個別の要因は適応感を同じように予測するとは限らない<sup>7</sup>。それと同様の指摘が岡田（2015）によってもなされている。抽象度の低い「下位領域加算型」の適応感ではなく，より抽象度の高い学校生活全般における意識や行動（e.g.，学校環境への認識，学校生活における感情，Ladd & Burgess, 2001）に注目するべきであるという指摘である。

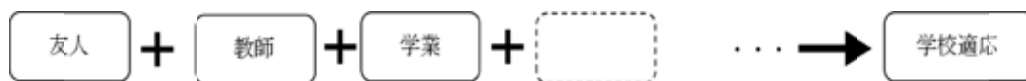


Figure 1 「下位領域加算型」としての適応感（岡田，2015をもとに作成）

しかしながら，岡田（2015）は，大久保（2010）における適応感の捉え方は生徒個人の主観的な感情に焦点が向いており，ある面で適応的な生徒はもう一方では適応的でないと測定されてしまうという問題を指摘として挙げている。この問題に対して岡田（2015）は適応感を「主

6 しかしながら，大久保（2005）や岡田（2015）が指摘する「学校適応感」に近い概念——学校享受感（古市・玉木，1994）や教室にいる時の気分（酒井・菅原・真栄城・菅原・北村，2002）——が存在したこと注意到されたい。

7 その一方で，友人との関係の良さはどの学校でもほぼ同じ強さで適応感を予測した。

8 ①は「学校では自分の気持を素直に出せていると思う」というような欲求充足の状態を指す。②は「学校生活の中で求められていることはできていると思う」というような要請対処の状態を指す。③は「学校のみんなから嫌われている気がする」というような孤立傾向と「先生に反抗したり，乱暴したことがある」というような反社会的傾向の状態を指す。

体と環境との調和的關係」の視点から捉えることにより克服できるとしている。これは、①個人の内的環境における適応、②個人の外的環境における適応、③システムにおける適応という三点に纏められる<sup>8</sup>。岡田（2015）の視点は①と②を心理的適応として、大久保（2010）の適応感の捉え方に相当する概念として捉え、そこに③を社会的適応として加えて、これら二つの視点から学校適応感をより全体的なものとして捉えようとしている。したがって、現在までの様々な研究を通して学校適応感とは児童・生徒が学校に適応している状態を示す一指標であることは共通しているが、その適応感の構成概念は研究によって違いがみられる。

## 学校適応感を予測する要因

次に、学校適応感はどのような変数と関連するのかを概観していく。大久保（2010）が指摘するように、学校適応感には、性格特性や社会的スキルなどの個人変数、ストレスなどの環境変数、要請と対処などの個人-環境の適合変数とそれぞれ関連する。しかしながら、測定された変数としての学校適応感の構成概念は研究によって異なるため、細やかに分類することは煩雑になってしまうことが考えられる。そこで、先に挙げた適応感の整理にしたがい、スクール・モラルをはじめとする「下位領域加算型としての適応感」と、青年用適応感をはじめとする「個人-環境の適合性としての適応感」の二つの側面から検討していく。

## 下位領域加算型としての適応感

ここで挙げる「下位領域加算型としての適応感」とは、学業や対人関係といった個別具体的な感情や認知を測定する変数である。個人変数との関連は、学業成績が高いことや望ましいとされる性格特性が高いスクール・モラルに繋がる（松山・倉智, 1969）こと、学習・対人関係・健康状態には知能が一番関わっていること（吉崎, 1982）、学校生活での満足が高いスクール・モラルに繋がる（河村, 1999b）こと、規範を順守する態度はいじめ加害経験者では低いこと（本間, 2003）が述べられている。これらの研究では、適応的であるほど、望ましい性格特性を持ち、良好な学業成績で、満足した生活を送っているという結果であった。つまり、個人の持つ良好な特性といったポジティブだと考えられている要因は適応感を向上させるということである。次に環境変数との関連では、教師からの要請に適合した特性を持つ児童は適応感が高い（飯田, 2002）こと、教師の強い管理意識を生徒が知覚することが適応感の低下に繋がる（佐藤・河村, 2000）こと、ストレスはソーシャルサポートを媒介としてスクール・モラルに影響を与えること（石津, 2006）や個人の学校生活の満足感は学級風土（伊藤・松井, 2001）の肯定的な認知と正の関連を示す（安藤・田嶋, 2013）ことが述べられている。これら

8 ①は「学校では自分の気持を素直に出せていると思う」というような欲求充足の状態を指す。②は「学校生活の中で求められていることはできていると思う」というような要請対処の状態を指す。③は「学校のみんなから嫌われている気がする」というような孤立傾向と「先生に反抗したり、乱暴したことがある」というような反社会的傾向の状態を指す。

についても、良好な環境といったポジティブだと考えられている要因が適応感を向上させるということである。

### 個人-環境の適合性としての適応感

ここで挙げる「個人-環境の適合性としての適応感」とは、学校全体に対して抱く抽象的な感情や認知を測定する変数である。個人変数との関連では、良好な級友との関係が学校享受感を向上させる（古市・玉木，1994）ことや適応感が学校享受感に対しては正の相関を、抑うつとは負の相関を示した（大久保，2005）こと、ソーシャルスキルの高さは学校生活に対する満足感と関連すること（飯田，2003）が述べられている。環境変数との関連では、学級風土のうち対人関係の良好な風土は学校享受感を予測した（西田・田嶋，2000）ことや学校適応感は環境からの要請と正の相関を示した（大久保・加藤，2005）こと、教師のユーモアさの認知と女児児童の学校享受感とは正の相関を示す（小林・上田，2008）ことが述べられている。個人-環境の適合の良さとの関連では、環境からの要請と個人の欲求との不一致が適応感と負の関連を示した（大久保・加藤，2005）ことや環境要請に対する自己評価の不一致が心理的適応と負の関連を示したこと（岡田，2015）が挙げられる。これらについても、社会的に望ましいとされる個人特性、環境や個人が環境とのマッチングが果たされているといった、ポジティブだと考えられている状態において、個人-環境の適合が果たされるため、適応感が高くなるということを示した。

下位領域加算型としての適応感と、個人-環境の適合性としての適応感と適応感を向上させる要因との間の関係を纏めると、どちらの種類の適応感であっても、個人変数の良さ、環境変数の良さ、個人-環境の適合性の良さが高い学校適応感の要因となっている。そして、これらはすべて社会的に望ましいと考えられる状態が学校適応感を予測していると捉えることができるだろう。

### 社会的に望ましい要因のみが学校適応感を予測するのか

しかしながら、社会的に望ましい要因のみが高い学校適応感を予測するわけではない。例えば、下位領域加算型としての適応感では、いじめ加害者は友人関係が他の生徒よりも良好である（本間，2003）ことが明らかとなっている<sup>9</sup>。個人-環境の適合性としての適応感では、「荒れている」中学校の中で不良生徒は他の生徒と比べて学校での居心地が良いという結果（大久保・青柳，2003）や、過剰適応の方略的側面は学校適応感を高める（石津・安保，2008）ことが示されている。このように、学校適応感はいじめ加害や反社会的行動などの社会的に望ましくない要因が学校適応感を向上させる要因となる可能性もある。

9 また、自尊感情においても、いじめ加害者の方が他の生徒よりも高いことが示されている。

## 学校適応の問題としての「スクールカースト」

ところで、学校適応に関する問題として最近では「スクールカースト」と呼ばれる問題（堀，2015；森口，2008；鈴木，2012）が提起されてきている。「スクールカースト」とは仲間集団の間にインドにおけるカースト制のような地位変動性が低い階層が生まれ、生徒の学級での生活や学校適応にかなりの影響を与えている現象である。「スクールカースト」について定義を行なっている主要な研究として、森口（2008）と鈴木（2012）が挙げられる。森口（2008）は、1軍、2軍というようなクラス内のステータスを表す言葉と定義しており、学級内の地位を8つに区分している。鈴木（2012）では、森口（2008）の定義を踏襲しつつも、「スクールカースト」は生徒にとって多様な基準によるクラス内ステータスとして意識され、そのステータスによって使用できる権力に違いが発生する一方で、教師からは能力として把握されていると指摘し、森口（2008）のように細やかな地位の区分については言及していなかった。この2つの定義を勘案するならば、「スクールカースト」とは何らかの基準に基づく学級内における集団間の階層関係であることと定義できる<sup>10</sup>。また、「スクールカースト」においては高地位集団に属する生徒は下位集団に属する生徒に対して攻撃的なふるまいや卑下をおこない、彼らよりも学校生活を享受している様子が語りを通してみられる（鈴木，2012）<sup>11</sup>。その一方で、下位集団に属する生徒は、低地位集団に属するが故に教室での居心地の悪さを経験する（鈴木，2012）<sup>12</sup>。この問題に関して教室内の「友だちグループ」間の地位<sup>13</sup>と学校適応感の関連を検討した研究（水野，2014；水野，2015；鈴木，2012）では、教室内の「友だちグループ」間の地位が高い生徒ほど、①下位領域加算型としての適応感と、②個人-環境の適合性としての適応感のどちらも高いことがわかった。つまり、生徒の「友だちグループ」の教室内的の地位が高ければ、適応感が向上するということである。この結果は直接的ではないものの、生徒個人の人気に基づく指標ではなく教室内における集団間の「地位」に基づく指標が、生徒の個人-環境の適合性の視点に基づく学校適応感を向上させたという意味で、「スクールカースト」の存在を示唆するものであると考えられる。

## 「学校適応の負の側面」に注目する

このように、いじめ加害者や「不良生徒」、そして「スクールカースト」などの社会的に望

10 ところで、なぜ「カースト」と呼ばれるかについてはインドのカースト制度という固定化された身分制度に由来しており、実際に「友だちグループ」間の地位の変動可能性が極端に低いことも示されている（鈴木，2012）。

11 高地位集団の生徒が低地位集団の生徒に対して「プロフィール帳」を渡して、それを書いてもらった後にゴミ箱に捨ててそれを笑うというような行為（鈴木，2012 pp.105-106）や、高地位集団の生徒が低地位集団の生徒に対して理不尽な愚痴を浴びせる（鈴木，2012 p.108）語りがみられた。

12 自身の「友だちグループ」の「ランク」に見合った振る舞いをしなければ「学校でさいな楽しいことをする権利」を奪われるという語りがみられた（鈴木，2012 pp.133-135）。

13 従来の生徒の地位に関する研究ではソシオメトリー（e.g., Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982）による地位が用いられてきた。しかしながら、ソシオメトリーは仲間による評定であり、性格特性や「人気がある—人気がない」という評定の次元であるため、「スクールカースト」で指摘されている「地位」とは異なる概念である。

ましいとはいえない要因が生徒の学校適応感を高める要因として存在すること——「学校適応の負の側面」——が示された。つまり、学校適応感が高いと測定される生徒は、社会的に望ましい要因だけではなく、これらの社会的に望ましくない要因でさえも関係してくると考えられる（Figure 2）。言い換えると、学校に適応している生徒は学校生活上で少なくともその生徒にとっては好ましい状態にある一方で、他の生徒との関係や教師との関係から見た時には好ましい状態とはいえないだろう。さらに、「スクールカースト」の問題は「友だちグループ」間の関係性に階層性を帯びることを意味する。そのため、低地位集団の生徒は友だちとの仲が良好であり孤立していない状態であるにもかかわらず学校適応感が低下すること、また、高地位集団の生徒の支配的な振る舞いは問題行動のような反社会性までは持ち合わせていないため、心理的適応と社会的適応を組み合わせた適応感の捉え方（岡田，2015）でもその様相を検出できないと考えられる。したがって、学校適応感に関する新たな捉え方の視点が必要になるのではないかと考えられる。

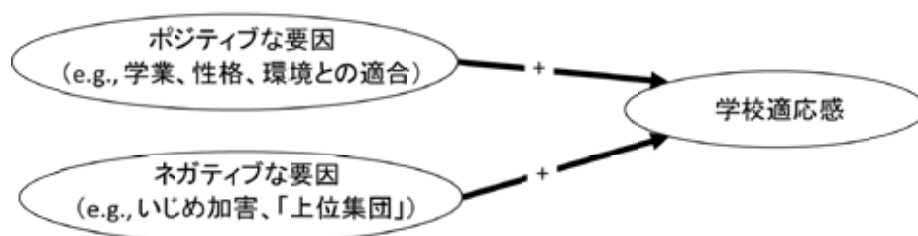


Figure 2 学校適応感を向上させる要因

また、これまでは学校に適応している生徒ではなく、学校への適応に困難を抱えている児童・生徒に対する支援（e.g., 江村・岡安，2003）などが考えられてきた。しかしながら，上記の結果を踏まえれば，学校に適応している生徒に対しても目を向ける必要があるだろう。したがって，今後は高い適応感を示す生徒が持つ問題<sup>14</sup>に対しても注目する必要があると考えられる。

## 文献

- 安藤智子・遠藤利彦（2005）．青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦（編著）アタッチメント—生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房，pp127-73.
- 安藤 徹・田嶋誠一（2013）．学級風土質問紙における生徒の見立てに関する研究 九州大学大学院人間環境学研究院紀要，14，25-32.
- 浅川潔司・尾崎高弘・古川雅文（2003）．中学校新入生の学校適応に関する学校心理学的研究 兵庫教育大学

14 心理的な適応の指標としてよく用いられる自尊心（self-esteem）においても同様のことが議論されている（Baumeister, Smart & Boden, 1998）。自尊心が高いことは社会的に望ましいと考えられているが，高自尊心は高い攻撃性や自己愛傾向を示すという適応的な行動や情動に必ずしも結びつかないことが示されている。

- 研究紀要, 23, 81-88.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1998). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological review*, 103, 5-33.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. (1982). Dimensions and Types of Social Status: A Cross-Age Perspective. *Developmental Psychology*, 4, 557-570.
- 福島県教育センター教育相談チーム (2008). 予防・開発的教育相談の推進に関する研究—小学校から中学校への移行期に焦点を当てて— 福島県教育センター研究紀要, 37, 37-48.
- 堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体—キレイゴト抜きのいじめ対応— 小学館.
- 古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- 五十嵐哲也 (2011). 中学校進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理学研究, 59, 64-76.
- 飯田順子 (2003). 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連, 学校心理学研究, 3, 3-9.
- 飯田 都 (2002). 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して— 教育心理学研究, 50, 367-376.
- 石田靖彦 (2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 287-292.
- 石津憲一郎 (2006). 中学生のスクール・モラルを支える要因の検討 学校心理学研究, 6, 3-17.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (2001). 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 49, 449-457.
- 河村茂雄 (1999a). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度 (高校生用)— 岩手大学教育学部年報, 59, 111-120.
- 河村茂雄 (1999b). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用 (高校生用) 岩手大学教育学部研究年報, 59, 101-108.
- 河村茂雄 (1999c). 楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U (中学校用) 実施・解釈ハンドブック 図書文化.
- 橋川真彦・高野玲子 (2005). 中学生における学校適応感の構造と測定 宇都宮大学教育学部紀, 57, 17-25.
- 小林朋子・上田明日美 (2008). 小学生の学校の楽しさに影響を与える教師のユーモア行動に関する研究 静岡大学教育実践総合センター紀要, 15, 125-132.
- 小泉令三 (1992). 中学校進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, 40, 348-358.
- 小泉令三 (1995). 小学校中学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44, 295-303.
- 近藤邦夫 (1994). 生徒と教師の関係づくり—学校の臨床心理学— 東京大学出版会.
- Ladd, G. W., & Burgess, K. B. (2001). Do Relational Risks and Protective Factors Moderate the Linkages between Childhood Aggression and Early Psychological and School Adjustment?. *Child Development*, 72, 1579-1601.
- 松山安雄・倉知佐一 (1969). 学級におけるスクール・モラルに関する研究 第一報 大阪教育大学紀要, 18 (IV), 19-36.
- 南 雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村 淳 (2011). 小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究 教育心理学研究, 59, 144-154.
- 水野君平 (2014). 「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル, 学校適応との関連 日本教育心理学

- 会第56回総会発表論文集, 748.
- 水野君平 (2015), 「友だちグループ」観の関係性が教室への居心地の良さに与える影響—社会的支配理志向性 (SDO) の媒介過程に着目して— 学校心理学会第17回大会発表論文集, 73.
- 文部科学省 (2014), 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」 文部科学省.
- 森口 朗 (2007), いじめの構造 新潮新書.
- 西田純子・田嶋誠一 (2000), 中学校の「学級風土」に関する基礎的研究—「教師項目」を含む尺度作成の試み— 九州大学心理学研究, 1, 183-194.
- 岡田有司 (2008), 学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応—適応することと享受することの違い— パーソナリティ研究, 16, 388-395.
- 岡田有司 (2015), 中学生の学校適応 ナカニシヤ出版.
- 大久保智生 (2005), 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大久保智生 (2010), 青年の学校適往還に関する研究—関係論的アプローチによる検討— ナカニシヤ出版.
- 大久保智生・青柳肇 (2003), 中学生の問題行動と学校および家庭環境への適応感との関連—個人-環境の適合性の視点から— 日本福祉教育専門学校紀要, 11, 11-19.
- 大久保智生・加藤弘通 (2005), 青年期における個人-環境の適合の良さ仮説の検証—学校環境における心理的欲求と適応感の関連— 教育心理学研究, 53, 368-380.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002), 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 佐藤謙二・河村茂雄 (2000), 教師の管理意識と生徒の学校適応との関連の分析 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第, 10, 75-80.
- 下田芳幸・石津憲一郎・樫村正美 (2013), 中学生における感情への評価と学校適応感の関連性についての検討 心理学研究, 84, 576-584.
- 杉本希映・庄司一子 (2006), 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学研究, 6, 31-39.
- 角谷詩織 (2005), 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか—学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから— 発達心理学研究, 16, 26-35.
- 鈴木 翔 (2012), 教室内カースト 光文社.
- 竹村明子・前原武子・小林稔 (2007), 高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係 教育心理学研究, 55, 1-10.
- 谷井淳一・上地安昭 (1994), 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 谷川雄司 (2012), 学級経営への効果的な支援の在り方—Q-Uの結果を生かした支援を中心として— 福井県教育研究所研究紀要, 117, 15-28.
- 戸川行男 (1956), 適応と欲求 金子書房.
- 都筑 学 (2001), 小学校から中学校への進学にとまなう子どもの意識変化に関する短期縦断的研究 心理科学, 22, 41-54.
- 吉崎静夫 (1982), 「学校適応」を規定する要因の検討 大阪大学人間科学部紀要, 8, 37-59.

## **The analysis of relationships between school adjustment and predictors (1)**

**Kumpei MIZUNO**

### **Key Words**

school adjustment, subjective adjustment, school life, “School Caste”

### **Abstract**

The goals of this study were to review the studies about school adjustment in Japan and show “negative aspect of school adjustment” which had not been studied in detail in previous studies. This study focused on predictors of subjective adjustment, especially the index of school adjustment. Further, the author demonstrated that the socially desirable and undesirable factors were the predictor of subjective adjustment. For example, a socially desirable factor could be in terms of academic achievement which were related to the goodness of subjective adjustment. In contrast, bullying was socially undesirable factor that was related to the goodness of friendship. Altogether, the socially desirable and undesirable factors were positively related to school adjustment. In terms of the findings, this study revealed that “School Caste” was the phenomenon, in which students in the high status group tend to prefer classroom hierarchy, and behaved dominantly in their classroom. In addition, they were likely to adjust to school life better than those of the lower status group. In conclusion, “School Caste” was the socially undesirable factor, and was also a “negative aspect of school adjustment”. Moreover, the author suggested that the existence of “School Caste” had led to various problems in school, which provided good grounds to examine this topic in the future studies.